新オブリビアの伝説　悪役たちの物語

江美里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新オブリビアの伝説　悪役たちの物語

【Ｎコード】
Ｎ６５９７Ｋ

【作者名】
江美里

【あらすじ】
ポケモンレンジャー光の軌跡の悪役キャラクターに、実はこんな話があったとしたら、あなたはどう思いますか？
これは、悪役たちのまだ知られていない物語。
〈注意〉
これは悪役について書くので、ポケモンレンジャー光の軌跡のネタバレがあります。嫌な方は見ないことをお勧めします。

作者からのｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

これを先に投稿しなくてすみません。
私からではなく、作者からのｐｒｏｌｏｇｕｅです。
設定上では、これを書いた人ということになっています。説明苦手なので分かりにくくてすみません。

作者からのｐｒｏｌｏｇｕｅ

あなたは、新しいオブリビアの伝説を知っていることだと思う。
勇者はまた、オブリビアに現れこの世界を救った。そして、かつての勇者のように、さまざまなポケモンの力を借りて人々の悩みを解決した姿は現代の勇者と呼ばれ、新オブリビアの伝説と書き改められた現代の勇者の話は、誰もが一度は読んだことに違いない。
しかし、あなたたちはまだ知らない、悪役と呼ばれた者たちの過去を。
それは神は本当にいるのかとまで思うほどに私には辛く思えた。
もしも私が彼らと同じ人生をたどったとして、私は悪にならないという自信がない。
出来るならば、知ってほしい。彼らの話を。
勇者とは別視点で書かれたこの話を。
そして、読み終わったら、全てを知ったら、考えてみてほしいことがある。
彼らについて、だ。
どう思ってくれてもいい。私だって彼らを許そうとは全く思わない。
だから考えは自由だ。
でも、もしも……。もしも彼らに対して何か今までと違う感情が生まれたのなら……。
もう一度、新オブリビアの伝説を読み直して、本当の悪を見つけてくれないだろうか。

作者からのｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

短くてすみません。これもあれもギリギリ投稿できたみたいなもので凄く短いですよね。
次回も頑張って早く更新したいです。

ｆｉｒｓｔ，Ｄｏｒｅｓｕ，ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

この小説は、他の方々の小説と比べ、下手です。
その上、更新絶対遅いです。
それでもいいという方は、是非読んでください。

first, Doresu, prologue

彼女は孤独だった
彼女は自分を否定されて生きた
だから彼女は無能でない自分になろうとした
彼女が思いついた方法は、他の人間になり替わることだった

それの代償は重かった
自分を消し去ることだった
自分を殺すことだった
自分を殺し消し去って残ったのは
誰でもない『存在』と
自分という存在が消失したという『事実』のみだった

それは恐怖だった
『存在』は自分を取り戻そうとした
それでも失った過去は戻らなかった
失った時間は戻らなかった
失った自分も戻らなかった

全てを失った『存在』は、自分を作り直し
自らの『存在』に名をつけた
『存在』は『ドレス』と名乗り
オブリビア地方を舞台として、劇を始めた
それは、フクシュウという名の劇だった

ｆｉｒｓｔ，Ｄｏｒｅｓｕ，ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございました。
次の更新も絶対に遅れます。すみません。
それでもがんばりますのでどうかよろしくお願いします。」

ｆｉｒｓｔ，Ｄｏｒｅｓｕ，ｏｎｅ（前書き）

私からしたらまあまあ早い投稿の気がします。
ちょっと頑張って長く書いたつもりです。
読みにくさが倍増した気がします。

first, Doresu, one

彼女は、親の存在を知らなかった。
彼女には、存在するその理由すら分からなかった。
それでも彼女は生きていた。
存在する理由すら分からない彼女が生きる理由は夢。
真っ白な場所で、女の人に
「ごめんね、ごめんね……」
何度も、謝られた。
「必ず、会えるから。だからそれまでは生きていて」
手を、握られた。
「これは、お守り。気休めだって分かってるんだけどね……。でも、持っていてほしいの」
とけない氷のブレスレットを渡された。
それが少女がいつも見る夢だった。
始めてその夢を見た朝、少女の腕には夢の通りのブレスレットがきらきらと輝いていて、その夢は現実だとささやいているようだったから――――だったから少女は生きている。
女の人に会うためだけに。

地図にすらのらない小さな村で、彼女は空いた家に住もうとした。
人が死ぬことはその村の人々にとっては日常茶飯事だからか、空き巣に入られた形跡がいくつもいくつもあった。死体は二階に放置されているにもかかわらず。
死体は燃やして、割れた窓ガラスは綺麗に抜き取り、板で打ち直す。
不格好ながら、雨風はしのげそうな小屋が出来た。
木の実を採り、空腹を満たす。池の水を、木の皮で作ったかごにす

くい、飲み水も確保した。
生きていくことのできる環境は一応整っていた。
しかし、人間は体が生活できる環境にあっても、心が駄目なら死んでしまうことしかできない。
よそ者で、お金のなさそうな彼女に村人は冷たかった。
土地代を無理やり要求し、払えるまで、とこき使い、子供たちは彼女をいじめ、その精神を破壊した。
それでも彼女には、ポケモンが味方だった。
直接攻撃することや、助けることはできなくても、彼らは彼女のために木の実を採ってきたり、偶然を装い、村人を攻撃した。
土砂崩れ、洪水、岩落としなどｅｔｃ，ｅｔｃ……
それでも心が完璧に回復するわけではなかった。
八つ当たりのように労働やいじめをエスカレートさせる村人たちのせいで彼女の心は粉々に砕けきっていた。
それを回復させることなど誰にできよう？

「役に立たないお前なんかを使って、金をやってるアタシに感謝してほしいわっ！」
似合わない派手なピンクのドレスを着て、茶色の中途半端な髪を無理やり整えつけたような髪型。
お世辞にも素敵とは言えない毎日毎日彼女を奴隷のように利用する村のリーダー。
金をやってる、と言ってもその金をすぐ土地代と言って奪い取られるのだから意味がない。
生きている価値もない、役に立たない、いらない、使えない。
彼女に容赦なく浴びせられる罵倒の数々。
反論さえも許されないのなら、言わないでいてほしい。そう言うことさえ許されない。
「そうそう、あんた、今日から娘の召使としてでも働いてもらうか

ら。ここからさっさと消えなさい！」
「あんたみたいなやつを使ってやるんだから、ちゃんと感謝してよね。ほら、消えなさいよ！」
一礼をして、部屋を出ていく。
彼女はふらふらと、リーダーの娘の部屋に歩き出した。
途中通る他の召使達に蹴飛ばされ、殴られ、雑用をさせられ、それでも全力のスピードで歩く。全力と言っても、歩くよりはるかに遅かったが。
洗濯、買い物、なんだってやらされた。時には、物のように扱われ、知らない場所へ奴隷として貸し出されたこともあった。もう今はそれすら生温く思える。
それが召使とリーダーの扱いなのだから、あのリーダーの娘だ、どんなことになるか分からない。
「……失礼します」
口の中で呟くようにして彼女は、リーダーの娘、ミイナの部屋の扉を押した。

ｆｉｒｓｔ，Ｄｏｒｅｓｕ，ｏｎｅ（後書き）

次もなるべく頑張ろうと思ってます。
こんな読みにくくつまらない小説でも、読んで下さる方がいるので
したら、ありがとうございます。

ｆｉｒｓｔ．Ｄｏｒｅｓｕ．ｔｗｏ（前書き）

遅れてすみません！前の投稿からかなりたってますよね？すみません！

そのうえ短いし、もうダメすぎる……。

本当にすみませんでした。

first. Doresu. two

「はい？」
あんなかすかな声でも聴きとったのか、豪華な家具類の置かれた部屋の奥、ソファーに座ったミイナと思われる娘が振り向く。
召使となった少女は、ミイナの容姿に無言となる。
下の方でリボンで結ばれた、腰までの茶色の髪。薄い水色に白のレースのリボンがよく似合っている。
リボンと同じ色のワンピースは膝と同じ位の長さで、白い靴下をはいている。色白で、整った顔立ち。
あのリーダーの娘とは思えない、綺麗な姿。
「あ、の……」
何と言おう、と言葉に詰まる少女に、
「ああ、貴女が新しいお友達？……そうね、これに着替えて」
少女の着ている白いぼろ布を見つめて、それから思いついたように何かを差し出す。
少女が広げてみると、白に限りなく近いピンクに、黒のレースのワンピース。靴下も黒。
「靴はこれかしら。薄いピンクに、黒のリボンなの。髪はまあまあ長いから、黒のゴムで結んで、シュシュつけたらどう？薄いピンクと黒のレース。趣味にあうかしら？私、レースとか、こういうのとか、大好きだから」
さらさらと説明しながら、棚を開けたり、かごから取り出したりと忙しそうに動くミイナ。
「あ、あのお……」
何をすればいいのだろう。固まってしまう。
「あ、そうそう。名前は？」
ミイナは思い出したように問いかけてくる。
「へ？あ、な、ないです……」

名付け親に会ったことすらない少女からしたら当然の答え。ただし、一般的などのルールに当てはめるとそれは少数派。つまり、異端。
少女は反応を予想する。
ありえない、なんで？
そんな、一般から見たときの少数派否定の言葉で返すだろう、と心の中でため息をつく。
が。
「なら、ナッカでいい？」
「は？」
「名前がないと不便でしょう？1とか2とかでも識別はできるから困りはしないけど、せっかくなんだもの、可愛い名前がいいし」
人間、想像と違うことが起こると理解するのが遅れるもので、今の少女の状況はまさしくそれだった。
「あ、はぁ……」
少女にはナッカという名前が与えられ、そして二人の奇妙な生活が始まった。

ｆｉｒｓｔ．Ｄｏｒｅｓｕ．ｔｗｏ（後書き）

本当に読んでくださっている方がいるんだとしたらすみません。
次こそは早く、と言いたいのですが、もうすぐ期末なので３週間後位になるかもです。
本当にいつも、すみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6597k/

新オブリビアの伝説　悪役たちの物語

2010年10月20日19時01分発行